アメリカ人口センサスに見るホーイ夫妻とシュネーダー夫妻――さらにプルボーとデフォレスト夫妻――

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2020-03-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En): Tohoku Gakuin University
	作成者: 高橋, 秀悦
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24184

アメリカ人口センサスに見る ホーイ夫妻とシュネーダー夫妻
～さらにプルボーとデフォレスト夫妻～

東北学院大学経済学部教授
髙橋　秀悦*

はじめに

日本の国勢調査（センサス）は、1920年の調査以来、西暦末尾「0」の年に「大規模調査」、「5」の年に（第2次世界大戦終戦時の1945年を除き）「簡易調査」が実施されているが、アメリカの人口センサスは、アメリカ独立から十数年を経た1790年から第1回調査が始まり、これ以後10年に一度（西暦末尾「0」の年に）実施されている。アメリカでは、1850年からは、「全数調査」が実施され、人口センサスの個票がアメリカ国立公文書館に保存されている。「72年ルール」に従い、個人情報保護のために72年間封印された後、個票が一般に公開される（森口（2014））。現時点では、アメリカ国立公文書館のホームページから、1940年調査までのデジタル化された個票（画像）を検索閲覧することができる。

1886（明治19）年、仙台での男子の（普通）中等教育学校の設立をめぐって、押川方義・ホーイ等と富田鐵之助・新島襄・デフォレスト等が対峙したが、文部大臣・森有禮、宮城県令・松平正直、仙台区長・松倉恂をはじめ仙台の有力者の支援を得た富田・新島の「半官半民」・「同志社の分校」たる宮城英学校（翌年に東華学校と改称、校長は新島襄、経営母体は東華義会）が認可され、押川方義は、仙台神学校を創立し、神学教育に専心することとなった。髙橋（2016）のテーマのひとつは、明治5年の森有禮、富田鐵之助、新島襄の3人のアメリカでの最初の出会いを確認することと、菅（2009）によって示唆されていた1870（明治3）年のアメリカ人口センサスにおける富田鐵之助と新島襄の調査個票を確認することにあった[1]。本稿は、筆者にとって、この延長線上の調査研究にあたる。

本稿の目的は、「校祖」押川方義とともに全身全霊を以て仙台神学校創立・運営に尽力された「校祖」W.E.ホーイと「校祖」D.B.シュネーダーのアメリカ人口センサスの調査個票をもとに、そのファミリー・ヒストリアを確認することにある。また、ホーイ夫人となるM.オールト、シュネーダー夫人となるA.シェーンバーガー、ドイツ改革派教会から派遣されて女性宣教師で宮城女学校（現在の宮城学院）の初代校長となったE.プルボー、及び国の重要文化財「デフォレスト館」の名称のもととなったJ.H.デフォレストの調査個票も、合わせて紹介する。各人の個票の検索においては、『東北学院百年史』や『ウィリアム・ホーイ伝』、さらには『シュネーダー博士の生涯』が有力な手掛かりとなったこと、またその記載内容もほぼ精確であったことを、ここに付記しておく（本稿で紹介した各種のエピソードは、ほとんどがこれらの文献に記載されたものであるが、直接引用したものを除き、参照ページを省略する）。

---

*仙台法務局の「旧土地台帳（片平丁79番）」の存在をご教示いただいた志子田光雄先生（東北学院大学名誉教授）に対し、また、総括的なコメントを下さった柴田良孝教授（東北学院大学文学部）・遠藤健一教授（東北学院大学文学部）・Wilson Alley教授（東北学院大学経済学部）に対し、さらに、シュネーダー夫人の誕生日等の調査にご協力いただいた東北学院史資料センターの方々に対し、ここに記して謝意を申し上げます。

[1]当時、富田は、ニュージャージー州サマセット郡ヒルズボロウ・タウンシップ（ミルストーン）のオランダ改革派教会に、また、新島は、マサチューセッツ州のアーモスト・カレッジの寮にいた。彼らの個票については、「参考文献・参考資料」を参照のこと。

[2]仙台法務局の「旧土地台帳」によれば、デフォレスト館の（南六軒丁通りを挟んだ）真向かいの土地（片平丁79番、約1反6畝6歩（約498坪）：約1,645平方メートル）の所有権は、「市原盛宏（東華学校副校長）→ 同志社（明治27年1月10日）→ 押川方義・橋本経光（押川の兄で東北学院神学部の最初の卒業生）等5名の共有（明治28年4月20日）→ 二宮安次ほか（明治30年10月19日）→ 官有地（明治32年9月1日）→ 文部省（明治39年10月30日）」と移転している。なお、明治32年の「官有地（学校敷地）」は、現在の宮城県仙台第一高等学校の前身にあたり、「宮城県尋常中学校」から「宮城県中学校」と改称された中学校敷地を、また、明治39年の「文部省」は、1902（明治39）年設立の旧制仙台高等工業学校（SKK）敷地を意味している。

校祖押川方義とその兄・橋本経光等が所有した「片平丁79番」は、わずかながら、本学の「ホーイ記念館」敷地西側の三角形の先端と重なっている。歴史はめぐり、2014年、東北学院は、この部分を東北大学から買い戻したのである（詳細は、髙橋（2017）を参照のこと）。

1. 校祖W.E.ホーイと夫人メアリ

(1) ホーイの家族

2016年3月、東北学院大学正門の真向かいの東北大学から取得した地に「ホーイ記念館」が完成し、9月から正式に供用を始めた[2]。記念館の名称は、東北学院三校祖のひとりW.E.ホーイにちなむ。このホーイの「出生から献身まで」の記載は、『東北学院百年史』や『ホーイ伝』に尽きるが、「ほとんど当然のことながら、ウィリアム少年の幼少期についての記録は皆無に近い（『東北学院百年史』、p.176）」から、本稿で紹介する人口センサスは、この時期の貴重な資料になる。

1858（安政5）年6月4日生まれのウィリアム・E・ホーイは、1860年の第8回アメリカ人口センサス（Population Schedules of the 8th Census of the United States 1860）に、「1歳　男性」として記載されている（第1表）。アメリカ合衆国ペンシルバニア州ユニオン郡ライムストーン・タウンシップ（Limestone Township in the County of Union）での人口調査であった。センサスに記載された「最寄りの郵便局」は、ミフリンバーグ（Mifflinburg）であった。ここが、ホーイの出生地である。なお、この1860年調査は、南北戦争前でもあり、調査集計表の各ページの冒頭には、黒人奴隷と対比される身分的な表記である「自由な居住者（free inhabitants）」も印字されている。

第1表のように、父ジョナス（34歳）・母エリザベス（31歳）との間には、二男二女が生まれ、ウィリアムは、第三子であった。祖父ジョンが農地を150エーカー（約60ヘクタール）まで拡大したとされるが、この調査では、ジョナス所有分のみで12,000ドルの不動産（農地）を持つまでになっていた。このほかに、1,000ドルの（農地以外の）個人資産もあり、2人の農業従事者（servant）も雇っていたのである。

第1表　ホーイ・ファミリー（1860年人口センサス）

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	職業	出生地
177	193	Elias　Hoy	34	m	Farmer	Penna
		Leah　Hoy	32	f		〃
		＜以下、3名省略＞				
		Lydia　Hoy	42	f		〃
178	194	Jonas　Hoy	34	m	Farmer	Penna
		Elizabeth　Hoy	31	f		〃
		Mary C.　Hoy	7	f		〃
		James G.　Hoy	3	m		〃
		William E.　Hoy	1	m		〃
		Ella　Hoy	6/12	f		〃
		Benjamin　Eshleman	18	m	Servant	〃
		Matilda　Adames	20	f		〃

隣接地には、ジョナスの双子の兄弟エライアスの家と農地があり（不動産評価5,000ドル、個人資産650ドル）、夫人レア、娘2人、農業従事者1人のほか、双子の兄弟の姉リディア（42歳）も同居していた。

1870年の第9回人口センサスからは、エライアス・ホーイの個票を未だ探し出せていないが、校祖ホーイ一家については、第2表のように検索抽出される。住所・最寄り郵便局は、1860年調査と同じ場所である。この表から、「母親のエリザベスはウィリアムが6歳の時死亡しているので、ウィリアムは四人の兄弟・姉妹と共に継母のキャサリンによって育てられた（『東北学院百年史』、p.176）」ことを確認することができる。すなわち、「キャサリン、44歳、女性、白人、主婦」であり、兄弟姉妹（10歳～17歳）は、すべて「学校在学中」と記載されている。また、ジョナスの姉リディアも、エリザベスの死亡後にエライアス家からこちらに移り、「リディアの親身の助けを得て」とあるように（『ホーイ伝』、p.4）、キャサリンを親身になって助けたのであった。勤勉による農地拡大のためか、南北戦争後の不動産価値の上昇のためか、詳細は不明だが、父ジョナスは、10年前のほぼ2倍の不動産（23,324ドル）を持ち、（農地以外の）個人資産も2,700ドルまで増やしている。

第2表　ホーイ・ファミリー（1870年人口センサス）

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	カラー	職業	出生地
144	146	Hoy　Jonas	45	M	W	Farmer	Pennsylvania
		—　Catharine	44	F	W	Keeping House	Pennsylvania
		—　Jonas	14	M	W	Attending School	Pennsylvania
		—　Mary C.	17	F	W	Attending School	Pennsylvania
		—　William	12	M	W	Attending School	Pennsylvania
		—　Ella	10	F	W	Attending School	Pennsylvania
		—　Lydia	50	F	W	Retired House Keeper	Pennsylvania

ウィリアムは、1882年のフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジ卒業とされていることから、1880年の第10回人口センサスのときは、ランカスター市内に住まいしていたと思われるが、この第10回センサスでも、依然として、ライムストーン・タウンシップでの調査の中に記録されている。伯母リディアも健在であり、ホーイ家の家族構成にも、1870年センサスと変更はないが、ウィリアムと同年齢の

男性シャーリー（続柄や職業は記載なし）が加わっている。

（2）ホーイ夫人メアリ

1885（明治18）年4月21日、ホーイ、エリザベス・プルボー、メアリ・B・オールトの3人が、ドイツ改革派教会によって日本派遣宣教師として選任され、ホーイは、この年の暮れから日本で活動を始め、翌年1月に仙台に着任する。プルボーとオールトは、1886（明治19）年7月に来日し、同月、仙台に着任し、宮城女学校（現在の宮城学院）の開校準備にあたり、9月から授業を始める。翌1887年12月に、ホーイとオールトは、後に述べるシュネーダー夫妻の横浜到着に合わせて、開通したばかりの上野までの鉄道に乗車して上京し、27日に東京・築地のミラー宣教師宅で結婚式を挙げる。

メアリ・オールトは、1863年9月10日生まれであり、人口センサスでは、1870年のペンシルバニア州キュンバーランド郡メキャニックスバーグ（Mechanicsburg in the County of Cumberland）の調査に登場する（第3表）。父ジョン（34歳）は聖職者（clergyman）であった。サラ（31歳）との間には、一男二女があり、メアリはその長女で、当時6歳であった。教会には、家事手伝い（Domestic Servant）の女性も1人いたようである。

第3表　オールト・ファミリー（1870年人口センサス）

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	カラー	職業	出生地
352	352	Ault　John	34	M	w	Clergyman	Pa
		—　Sarah J.	31	F	w	Keeping house	Pa
		—　Mary B.	6	F	w		Pa
		—　John W.	4	M	w		Pa
		—　Anna E.	1	F	w		Pa
		Cross　Sarah	16	F	w	Domestic Servt	Pa

1880年の人口センサスでは、オールト・ファミリーは、ペンシルバニア州アダムス郡リトルタウン・ボロー（Littletown Borough in the County of Adams）に転居している。父ジョン・オールトの職業は、「ドイツ改革派聖職者（minister）」となっている。メアリの下には、2人の妹も生まれ、一男四女の弟妹の年長者（16歳）となっている。

1891（明治24）年、仙台神学校は東北学院と名称変更し（宮城県学務課に東北学院の設立を申請し認可され）、翌年から理事局を組織し、押川が院長、ホーイが理事局長（副院長兼任）に就任する。これ以後、ホーイは、東北学院の理事局長として東北学院の経営と財務の最高責任者を務めることになる。そのホーイは、仙台神学校時代から個人資産を投じて経営と財務を担っていたのである。すなわち、1888年8月、ホーイは、本願寺仙台別院跡地の敷地の一部（1,200坪）を「自費で購入し」、11月には、そこに木造2階建て建物（教室・寄宿舎）を「自費で建築し」、新妻メアリの父にちなんで「オールト記念館」と名付けたのである（『東北学院百年史』、pp.284～292及びp.1310）。しかしながら、この土地と建物をめぐっては、ホーイとアメリカのドイツ改革派教会外国伝道局との間で確執・軋轢が生じた。外国伝道局では、オールト記念館の土地と建物は、伝道局に帰属すべきという主張がなされ、伝道局の理事の中には、「その妻が亡くなった父親から受け継いだ遺産を、ホーイがこのような形で用い尽くすことは、妻に対する思いやりを欠く行為であり、将来に対する見通しが甘い」と言う人もいたのである（『東北学院百年史』、p.291）。

1880年の人口センサスでは、ドイツ改革派教会聖職者の父ジョンが44歳、母サラが40歳であったが、この調査の後（メアリ17歳の時）、両親が相次いで逝去し、10代の育ち盛りの子供5人が残された。こうした状況にあったが、1885年、メアリは、師範学校の最上級生の時、外国伝道局の海外派遣宣教師に応募する。彼女は、その志願書の中で、幼い時から宣教師になる願いを持っていたことを述べた後、「私は今ではわが家を持たないひとり身ですが、弟や妹たちは、それぞれ住むところがあって幸福に暮らしております。私が面倒を見なければならない者は一人もおりません」とし、堅い決意を示す（『東北学院百年史』、p.325）。聖職者であったオールト家の個人資産は、1,050ドル（1870年人口センサス）であったから、1888年に土地購入費1,500円～1,600円、建築費800～900円とされる「オールト記念館」の取得費用にほぼ相当する[3]。メアリが受け継いだ遺産のすべてをオ

[3]この年、仙台神学校に赴任したシュネーダー夫妻には1,200ドルの年俸が支給されたことからすれば、オールトの資産は、ほぼ1年分の年収に相当する（なお、当時のアメリカ横断鉄道料金は、1人110ドル余、サンフランシスコ・横浜の太平洋横断の船賃は1人160ドルとされている）。

ールト記念館建設につぎ込んだとすれば、メアリに対する思いやりを欠く行為とのホーイに対する批判も的外れなものではない。しかしながら、ホーイは、「校舎を、私たちは建てなければなりませんし・・・・、私は主キリストのために、喜びをもって、負うべき重荷をあえて引き受ける決心をいたしました」として、全責任を負って決断したのである。新妻メアリに深く感謝し、その父のジョン・オールトの名をとり「オールト記念館」と名付けたのである。

1886（明治19）年には、仙台の男子普通中等教育機関として「半官半民の同志社の分校」である宮城英学校が富田鐵之助・新島襄・デフォレストの主導で設置され、この争いに後れをとった押川方義・ホーイは仙台神学校を創立することとなったが、翌1887年には、宮城英学校は「東華学校」と校名を改め、中等教育機関としての地位を確保し始めていたのである。この状況の下での、ホーイの一大決心をしての「オールト記念館」の建設であった。この「オールト記念館」こそが、東北学院にとっては自らが所有した最初の土地・建物であった。

2. 校祖D.B.シュネーダーと夫人アンナ

(1) シュネーダーの家族

ディヴィド・B・シュネーダーは、1857（安政4）年3月23日生まれであったから、ホーイよりも1歳以上年長であり、フランクリン・アンド・マーシャル・カレッジとランカスター神学校では2学年上級であった。ホーイは、ランカスター神学校出身の最初の海外宣教師となり日本に派遣されたが、シュネーダーは、1883（明治16）年から日本派遣宣教師を志願していたが、これが実現するのは、4年後（ホーイの派遣からほぼ1年半遅れ）のことであった。東北学院着任後は、50年にわたり東北学院とともに歩み、東北学院の興隆に寄与したことから東北学院の校祖のひとりとされ、東北学院では、シュネーダーを記念し、図書館を「シュネーダー記念東北学院大学図書館」と命名している。

さて、このシュネーダーの調査個票は、1860年、1870年、1880年の人口センサスともに、ペンシルバニア州ランカスター郡ブレックノック・タウンシップ（Brecknock Township in the County of Lancaster）での調査に記録されている。

（現代の）2010年の人口センサスでは、このブレックノック・タウンシップの人口は7,000人未満と小規模であるが、センサスは、3つのコミュニティ（ボウマンズヴィル、ファイブポイントヴィル、レッドラン）に分けて実施されている。1860年センサスでは、タウンシップの人口は、1,494人に過ぎず、タウンシップの「最寄りの郵便局」も、ボウマンズヴィルから8マイル西方の「リームスタウン（Reamstown）」であった。1870年センサスでは、人口が1,600人ちょうどとなり、アメリカの郵便制度の整備もあり、タウンシップの郵便局も「ボウマンズヴィル（Bowmansville）」に変わっている。

『東北学院百年史』では、「ボウマンズヴィルのシュネーダーの生家」という表現がなされ、『シュネーダー博士の生涯』では、「北米合衆国ペンシルヴェニヤ州ボーマンスビル村に生る」という表現がなされており、ここが出生地である。しかも、ディヴィドのミドル・ネームが「ボウマン（Bowman）」であることから、このBowmansvilleに由来するものと推測することもできよう。

各年の人口センサスともに、ディヴィドは、「Davis」と記載されている。これは、『シュネーダー博士の生涯』の「両親からデービスと呼ばれていたデービッド少年（p.11）」の表現の通りであった。

1860年調査では、父バルザー（28歳）、母エリザベス（27歳）、姉サラ（5歳）、ディヴィド（3歳）の家族構成であったが[4]、エリザベスの母と推測されるメアリ・ボウマン（Mary Bauman、59歳）という女性も同居していた（個票の紹介は省略する）。なお、ディヴィドが生まれた頃、親から買い受けた62エーカー（約25ヘクタール）の農地を開拓するのに懸命であったとされているが（『東北学院百年史』、p.273）、この人口センサスに記載された不動産評価額は2,000ドル、（農地以外の）個人資産は300ドルであった。

1870年調査では、ディヴィドの下には、チャールズ（9歳）、メアリ（5歳）、マーティン（6か月）が生まれている。不動産評価額は、倍増以上の4,500ドルとなり、個人資産も2,056ドルと急増している。なお、この1870年調査では、1860年調査の正しいスペルの「Schneder」ではなく、「Schader」を判読される表記となっている。

[4]1888年7月21日、シュネーダー夫妻に誕生した男子は、ディヴィドの父にちなみ「ジョン・バルザーと名付け」と名付けられたが、数日後に天に召されている（『東北学院百年史』、p.501）。

ディヴィドは、1880年のフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジ卒業とされていることから、1880年の第10回人口センサスのときは、ランカスター市内に住まいしていたとも思われるが、このセンサスでは、依然として、ブレックノック・タウンシップの調査に記録されている（第4表）。名前は、「Davis」のまま変わらないが、職業は、「学生（at college）」となっている。家族関係では、弟チャールズ（19歳）の職業が「教師（teacher）」となっていることが目を引く。この記録は、「弟のチャールズも教師になった」の通りである（『東北学院百年史』、p.275）』）。1870年調査で生後6か月だったマーティンは、1880年調査では記録されておらず、代わって、将来、医師となる一番下の弟のエイモス（4歳）が記録されている。さらには、バルザーの孫娘として、6歳のエマ（Good Emma）も記録されている（Goodは、このタウンシップでは比較的ポピュラーな姓である）。

第4表　シュネーダー・ファミリー（1880年人口センサス）

家屋番号	世帯番号	氏名	カラー	性別	年齢	続柄	職業	出生地	父の出生地	母の出生地
12	15	Schneder　Baltzer	w	m	45		farmer	Pennsylvania	Penn'a	Penn'a
		—　Lizzie	w	f	47	wife	Keeping house	Pennsylvania	Penn'a	Penn'a
		—　Sarah B.	w	f	25	daughter	at home	Pennsylvania	Penn'a	Penn'a
		—　Davis B.	w	m	23	son	at college	Pennsylvania	Penn'a	Penn'a
		—　Charles B.	w	m	19	son	teacher	Pennsylvania	Penn'a	Penn'a
		—　Mary B.	w	f	14	daughter	at home	Pennsylvania	Penn'a	Penn'a
		—　Amos B.	w	m	4	son	at home	Pennsylvania	Penn'a	Penn'a
		Good　Emma	w	f	6	grand daughter	at home	Pennsylvania	Penn'a	Penn'a

（2）シュネーダー夫人アンナ

1883年、ランカスター神学校を卒業したシュネーダーは、母教会のメイタウン教会から独立したばかりの、ランカスター郊外のマリエッタの教会に牧師として赴任する。シュネーダーは、ここで10歳年下のアンナ・シェーンバーガーとめぐり会い、1887年10月、レディング市の聖スティーヴン教会で結婚式を挙げ、日本に赴任する。12月21日に横浜に到着し、15日に開通したばかりの上野・塩竈間の鉄道に乗車し、1888年1月1日に仙台に到着する。このとき、アンナは19歳であった。

シェーンバーガー・ファミリーの個票は、1870年調査と1880年調査ともに、ペンシルバニア州ランカスター郡マリエッタ（Marietta in the Lancaster County）に記録が残されている。アンナは、1868年12月12日のマリエッタ生まれであったから、人口センサスでは、それぞれ、2歳、12歳と記録されている。

アンナの父ジョンは、「徴兵を避けるため12歳の時ドイツから渡米して来た（『シュネーダー博士の生涯』、p.31）」とか、「若い時に徴兵を忌避してドイツからアメリカに移住し、パン焼きを生業としていた（『東北学院百年史』、p.278）』）」とされている。人口センサスでの職業は、ともに「Baker」と記録され、出生地は、ドイツ中部のヘッセン大公国（ヘッセン＝ダルムシュタット：（英語表記）Hesse Darmstadt）であった。第5表の1880年調査では、名前は「John F」となっているが、1870年調査では、単に「フレデリック（Frederick）」であった。ドイツでの「フリードリヒ（Friedrich）」に由来する名前を、渡米後、10年以上も使っていたのである。さらに、1880年調査には父母の出生地も記載されているが、ジョンの父母（アンナの祖父母）は、当然のことながら、ヘッセン＝ダルムシュタットの出生であった。なお、1870年のアンナ一家の（パン屋の店舗・土地の資産価値と思われる）不動産価値が1,000ドル、（不動産以外の）資産価値が200ドルであった。無一文でヨーロッパからアメリカへ渡った移民も数多くいる中にあっては、（裕福なホーイ家やシュネーダー家とは比較にはならないが、聖職者であったオールトの父でも、1,050ドルの個人資産であったから）経済的に恵まれた方に入る。

第5表　シェーンバーガー・ファミリー（1880年人口センサス）

家屋番号	世帯番号	氏名	カラー	性別	年齢	続柄	職業	出生地	父の出生地	母の出生地
323	324	Schoenberger, John F.	W	M	37		Baker	Hesse Darmstadt	Hesse D.	Hesse D.
		—　Anna M	W	F	38	wife	Keeping House	Penna	Bavaria	Bavaria
		—　Anna M	W	F	12	daughter	At School	Penna	Hesse D	Penna
		＜以下、妹弟6名省略＞								
		Myer　Adam	W	M	42	Boarder	Baker	Baden	Baden	Baden

これに対して、母マーガレットは、（1880年調査では何故か同名のアンナ・Mと記録されているが）ペンシルバニア生まれであった。その父母は、ともにドイツのバイエルン（英語名：バヴァリア

(Bavaria)）生まれであった。

このように、アンナは、父がドイツ生まれ、母もドイツ移民二世とドイツ色豊かな家庭に生まれ育ち、1880年時点では、おまけにドイツのバーデン生まれのパン職人（44歳）も同居させていたのであった。なお、アンナは、「八人の子供の最年長のアンナ」とされているが（『東北学院百年史』、p.278)、このセンサスでは、二男五女の最年長者であった。

シュネーダー夫妻は、このマリエッタで知り合いになったが、婚約後まもなく、アンナの父の仕事上の都合で一家はレディング市に転居したことから、この地で結婚式を挙げることになったのである。

ホーイの先祖は、18世紀初頭にスコットランドからアメリカに移住したと伝えられ、また、シュネーダーの6世代前の先祖も、1729年9月にスイスからアメリカに移住したと伝えられており、既に紹介したように、ともに大規模な農地を耕作する裕福な農家に育った。経済的に成功すると、能力に恵まれた子供を聖職者にすることが誇りとされた時代にあって、ホーイとシュネーダーは、ともにランカスター神学校を卒業し、宣教師として日本に派遣されたのであった。ホーイ夫人メアリの先祖も、父方・母方とも植民地時代まで（父方は3代前まで、母方は4代前まで）遡れる家系であった。メアリ自身も、先に紹介したようにドイツ改革派教会の聖職者の娘であり、メアリ自身も女性宣教師として日本に派遣されたのであった。

これに対して、シュネーダー夫人アンナは、ペンシルバニア生まれではあるが、ドイツ移民の二世であった。パン職人の父の下で、幼い頃からたくさんの弟妹の世話をして育ち、教育を受ける機会にも恵まれなかったが、「生来の積極性と親しみやすさの故に」、「身体ごとぶつかって砕けることを意に介さない率直さ」があった（『東北学院百年史』、pp.278-279)。

3. 宮城女学校校長プルボー

アメリカのドイツ改革派教会外国伝道局は、日本での女子教育のために、1885年、2人の女性宣教師を選任し、翌年、2人を仙台に送る。宮城女学校（現在の宮城学院）の校長となるエリザベス（リズィ）・R・プルボーと、先に紹介した教員となるメアリ・B・オールトの2人である。押川は、当初から女子教育機関の設立を企図していたとされ、女子教育機関設置に関して他との競合もなかったので、押川が校主となり、宮城女学校の設置を申請し、1886（明治19）年9月18日に認可される。

1854年12月27日生まれのエリザベス（リズィ）は、1860年のペンシルバニア州ヨーク郡スプリング・ガーデン・タウンシップ（Spring Garden Township in the County of York）の人口センサスに登場する（第6表)。父ジョサイア（40歳）と母マーガレット（37歳）の間には、13歳の女子をはじめ二男五女があり、エリザベス（6歳）には、2人の兄・2人の姉・2人の妹がいた。2歳下の妹エマは、後に、結婚退職したオールトに代わって宮城女学校の教師となり、校長で姉のエリザベスの下で音楽等を教えることになる。

この当時のプルボー家は、農業に従事していた。18歳の男性を農業従事者として雇い、15,500ドルの不動産価値のある農地を耕作し、1,370ドルの（不動産以外の）資産を持つ大きな農家であった。1860年のこの15,500ドルの不動産価値は、シュネーダー家の2,000ドルはもとより、ホーイ家の12,000ドルよりも大きく、かなり裕福な農家であった。

第6表　プルボー・ファミリー（1860年人口センサス）

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	職業	出生地
289	303	Jessiah　Poorbaugh	40	m	Farmer	Pennsylvania
		Margaret	36	f		〃
		Ada	13	f		〃
		Henry	12	m		〃
		Meisen	10	m		〃
		Anna	8	f		〃
		Elizabeth	6	f		〃
		Emma	4	f		〃
		Clara	1 1/2	f		〃
		John Butcher	18	m	Servant	〃

1870年の人口センサスでは、プルボー家は、サマセット郡ベルリン・ボロー（Berlin Borough in the County of Somerset）に移っている（これが、『東北学院百年史』、p.324に記載された出身地であり、『ウィリアム・ホーイ伝』、p.13ではベルリンと記載された出生地である)。このセンサスでは、エリザベスは「リズィ（Lizzie)、15歳、女性、白人、ペンシルバニア」と記載され、父の職業も、「日用品を扱う商人」に変わっている（『ホーイ伝』によれば「商業に従事し、改革派教会の長老をつとめていた」のであった)。兄ヘンリーも21歳となり、職業も「Clerk in Store」の記載となっている。多分に父ジョサイアの店を手伝っているものと推測される。さらに2人の弟も生まれたが、着目すべきは、農村から都市に出て商業に従事することで、不動産価値が

1.4倍の21,800ドルの評価となり、（これを除く）個人資産も先の5.7倍の7,760ドルとなったことである。1860年代後半は、アメリカでは南北戦争が終結し、工業化・産業化が始まった時期であったから、プルボー家は、時流に乗って規模を拡大したのであった。

1880年のセンサスも、ベルリン・ボローでの調査である。「家屋番号」、「世帯番号」ともに「1」を付けられ、このボローでの最初の調査対象者になった（1880年6月1日調査）。父の職業「日用品を扱う商人」には変わりがなかったが、兄と姉が独立し、さらに2人の弟も生まれるなどの家族の変化も見られる。しかし、何故か、25歳となったエリザベス自身は、このボローでの最後の調査欄（1880年6月10・11日調査）の「単身者9世帯」と「親子1世帯」の項目の中に「追記」されているのである。エリザベスは、小学校教師をしていたとされていることから、親元から離れた単身者として自立して生活していたためか、あるいは、調査上の単純なミス・脱漏の補正のためなのか、は不明である（彼女の職業欄は、空白のままであった）。ともかくも、裕福な家庭に育ち小学校教師の経歴を持つエリザベスは、この6年後には、32歳で宮城女学校の初代校長になるのである。

4. 東華学校教師デフォレスト夫妻

2016（平成28）年7月25日、これまで登録有形文化財であった「東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）」が一段階スキップして「国の重要文化財」に指定され、文部大臣より「重要文化財指定書」が交付された。1869（明治20）年冬に建造されたもので、わが国に現存する外国人宣教師住宅として最も初期のものである[5]。デフォレスト夫妻はこの宣教師館の住人であった。

デフォレストは、1871年からアメリカ合衆国コネティカット州マウント・キャメルで会衆派（組合派）の牧師を務めていたが、1874年にアメリカン・ボードから日本に宣教師として派遣され、西日本（大阪）を中心に活動をしていた（この時期、アメリカン・ボードは、事実上、会衆派外国伝道局の指導の下にあった）。1874（明治7）年10月、デフォレスト夫妻は、ほぼ10年ぶりに帰国する新島襄（会衆派（組合派）教会牧師）とともに、コロラド号（サンフランシスコ～横浜の太平洋航路）に乗船し来日したのであった。

新島は、翌1875（明治8）年、同志社英学校を設立するが、それからほぼ10年後の1886（明治19）年には、宮城英学校（翌年、東華学校と改称）の設立にも関与したのであった。駐米少辨務使・森有禮は、1871（明治4）年3月、幕末に密航し渡米した新島のパスポート発給に尽力するが、その森は、明治19年には初代の文部大臣に就いていた。また、新島は、アメリカ留学生であった富田鐵之助とも、1872年3月（明治5年2月）にワシントンの辨務使館で出会うが（富田は、その後にニューヨークの領事心得や副領事に就任するが）、その富田は、明治19年には日本銀行の初代副総裁に就いていた[6]。

森は、文部大臣ではあったが、森個人としても、1875（明治8）年に、富田や福澤諭吉、さらには、東京府知事の大久保一翁や東京会議所の渋澤栄一等の助力を得て、商法講習所（現在の一橋大学）を設立した経験があったのである。新島は、この森を心の支えに、また、宮城英学校の設立の実務については、仙台藩士として幕末から富田と深い関わりがあった仙台区長・松倉恂等の仙台の有力者の支援を得て、ついに設立にこぎつけたのであった。

こうして、明治19年、宮城英学校（東華学校）は、校長・新島襄、副校長・市原盛宏、外国人教師デフォレスト等の体制で発足する（経営組織の「仙台造士義会（後の東華義会）」の責任者は、富田鐵之助であった）。他方、男子普通教育のための学校設立において新島・富田と競合した押川は、その設立を断念し、ホーイとともに、神学教育のための「仙台神学校」を設立する。

東華学校の外国人教師デフォレストは、今回、「国の重要文化財」に指定された宣教師館に住まいした[7]。そのデフォレスト（ジョン・キン・ハイド）は、1844年6月25日、コネティカット州ウエストブルックで生まれた。父ウィリアム・A・ハイドは、やはりこの地の会衆派の牧師であった。このジョン

---

[5]デフォレスト館に関しては、志子田（2013）及び『登録有形文化財デフォレスト館ハンドブック』等を参照し、デフォレストのエピソードは、*The Evolution of Missionary*を参照した（参照ページについては、記載を省略する）。

[6]髙橋（2016）を参照のこと。

[7]仙台市のデパート「藤崎」は、1819（文政2）年創業の「木綿商」から始まるが、中興の祖とも言われる4代目藤崎三郎助（1868-1926）は、15歳頃から7年にわたり、デフォレストについて英語を勉強したとされ、デフォレストの啓発もあって後年に南米貿易を始めたとも言われている（『藤崎三郎助』のp.1、p.30及びp.115等による。ただし、この著作には時間的経過を検討すると整合性がとれない記載も見受けられる）。

は、1850年の人口センサスでは、ミドルセックス郡ウエストブルック（West Brook in the County of Middlesex）の調査に登場する（第7表）。父ウィリアム（45歳）は、コネティカット生まれの「Long Minister」と記載されている。母マーサは、34歳とまだ若く、ジョンは、8人兄弟姉妹の5番目とされているが、当時は、姉1人と兄3人・弟2人がいた。

第7表　ハイド・ファミリー（1850年人口センサス）

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	職業	出生地
56	63	William A Hyde	45	m	Long Minister	Conn
		Martha M 〃	34	f		
		Mary B 〃	15	f		N.Y.
(改ページ)						
56	63	William H Hyde	12	m		N.Y.
		Joel M 〃	11	m		Conn
		Albert A 〃	9	m		
		John K 〃	6	m		
		Clisha B 〃	4	m		
		Lyman M 〃	2	m		

一家は、1854年には、同じコネティカット州グリーンヴィッチに移り、ジョンは、1860～1861年には、16歳でコネティカット州ボズラーヴィルの教師になる。1862～1863年には、南北戦争にも従軍（28th Connecticut Volunteers）した後、再び、ニューヨーク州アービントンの教師になっている。その後、1864年、20歳でエール大学に入学し（1868年の卒業）、1871年にエール神学校を卒業している。エール大学・神学校の勉学に際し、デフォレストと名乗ることが奨学金を与えられる条件であったことから、ジョン・キン・ハイドは、両親の同意も得て、公式に、ジョン・ハイド・デフォレストとなる。その後、デフォレストは、会衆派の聖職者叙任の後、コネティカット州マウント・キャメルの牧師を務め、1874年にアメリカン・ボードの宣教師となったのであった。

この略歴からすれば、1860年人口センサスでは「ハイド」として、1870年センサスでは「デフォレスト」として記載されたと思われるが、いまのところ個票を探せないでいる。ただし、1870年センサスでは、聖職者（Clergyman）の父ウィリアム・ハイド（65歳）と母マーサ（53歳）は、8人の子どもの末子エリザベス（19歳）とともに、コネティカット州ニュー・ロンドン郡ライム・タウン（Town of Lyme in the County of New London）に居住していたことが判明している。

ところで、デフォレストは、叙任後にニューヘイブンのサラ・C・コンクリンと結婚しているが、不幸にして、サラの逝去によってわずか1年の結婚生活で終わった。しかし、アメリカン・ボードの宣教師になることが決まる時期には、コネティカット州グイルフォード（Guilford in the County of New Haven）のサラ・エリザベス・スターと出会い、1874年9月23日に結婚し、アメリカン・ボードの年次総会で送別赴任の辞を述べた後、サンフランシスコからコロラド号に乗船し横浜に来たのであった。

このサラ・E・スターは、ヴァーモント、ミネソタ、コネティカットで7年間にわたって教師をしていた。実際、1870年の人口センサス（コネティカット州グイルフォード）では、24歳の「Sarah. E」の職業は「Teacher」であった（第8表）。父ジョン（49歳）は農民であったが、不動産評価3,000ドル、個人資産12,000ドルをもつ資産家であった。家族は、母リディア（50歳）、聖職者となった兄エドワード（26歳）、と学生の弟ジョン（22歳）のほか、同名の祖母サラ（87歳）もいた。

サラに関しても、1850年センサスと1860年センサスの個票はまだ見つけ出せない。

第8表　スター・ファミリー（1870年人口センサス）

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	カラー	職業	出生地
213	245	Starr John S.	49	M	W	Farmer	Conn
		— Lidya A	50	F	W	Keeps house	Conn
		— Edward C	26	M	W	Clergyman	Conn
		— Sarah E	24	F	W	Teacher	Conn
		— John N	22	M	W	Student	Conn
		— Sarah	87	F	W		Conn

むすび

『東北学院百年史』やメンセンディークが著した『ホーイ伝』、『シュネーダー博士の生涯』、*A Dream Incarnate* 等は、精確に記述されており、アメリカ人口センサスの調査個票と比較しても齟齬は見られない、というのが本稿の結論である。この精確さこそが、個票探索の大幅な時間短縮につながった。

これに対して、*A Biography of John Hyde DeForest*（デフォレスト伝）というサブ・タイトルがついた*The Evolution of Missionary*は、1914年に、夫妻の次女シャーロット（1905年に神戸女学院の第

5代院長に就任）によって刊行されたものであるが、東北学院関連の個人的ヒストリアほどには、若きデフォレストの精確な記述が少なく、個票検索も思わしくなかった。

アメリカ人口センサスからの新たな発見は、次の2点である。

シュネーダー夫人アンナの父が、ドイツからの移民であることはよく知られていたが、ドイツ中部のヘッセン大公国（ヘッセン＝ダルムシュタット）出身で、渡米後の10数年間、ドイツでの「フリードリヒ（Friedrich）」にちなみ、「フレデリック（Frederick）」を名乗っていたことである。

また、これまでプルボーの父がペンシルバニア州サマセット郡ベルリンで商業を営んでおり、彼女もここで生まれたとされていたが、1860年人口センサスから、ヨーク郡スプリング・ガーデン・タウンシップに居住し、父も農業を営んでいたことが判明した。南北戦争が終わった1860年代にベルリンというやや大きな町に移ったのである。

最後に、男子の普通教育学校設立をめぐって競合した押川・ホーイと新島・デフォレストであったが、本学所蔵の*The Evolution of Missionary*の表紙の扉には、

To the Library of Tohoku Gakuin,
in memory of my father's connection with the institution.
Charlotte B. DeForest.

と記されたシャーロットの献辞があることを紹介し、本稿をおえる。

【参考文献・参考資料】

A　論文等

森口千晶（2014）「二十世紀アメリカの養子と継子 ―国勢調査個票データにみる長期的変遷―」『経済研究』、65巻第1号、pp.1-22（一橋大学機関リポジトリ）

志子田光雄（2013）「登録有形文化財 デフォレスト館 ―仙台に現存する最古の宣教師館」『東北学院資料室』、Vol.12、pp.2-11.

菅（七戸）美弥（2009）「55名の「ジャパニーズ」―1870年米国人口センサスの調査票（population schedule）への接近―」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』、第60集、pp.137-151（東京学芸大学リポジトリ）

髙橋秀悦（2016）「幕末維新のアメリカ留学と富田鐵之助～「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀總裁」富田鐵之助（5）～」『東北学院大学経済学論集』第186号、pp.1-91.

髙橋秀悦（2017）「東北学院大学ホーイ記念館敷地と六軒丁と「ヒストリカル・トライアングル」」『東北学院史資料センター年報』第2号、pp.25-42.

B　年史・伝記等

DeForest, Charlotte *B., The Evolution of Missionary: A Biography of John Hyde DeForest,* Fleming H. Revell Company, 1914.

Mensendiek, C. William , *A Man for His Times: The Life and Thought of David Bowman Schneder, Missionary to Japan, 1887-1938,* 1972（C.・ウィリアム・メンセンディーク（著）・笹原昌・出村彰（共訳）、『シュネーダー博士の生涯 ―その人とその時代―』、学校法人東北学院、1976年）

Mensendiek, C. William, *Not Without Struggle The story of William E. Hoy and The Beginning of Tohoku Gakuin,* Tohoku Gakuin, 1986（C.・ウィリアム・メンセンデック（著）・出村彰（訳）、『ウィリアム・ホーイ ―苦闘の生涯と東北学院の創立―』、学校法人東北学院、1986年）

Mensendiek, C. William, A Dream Incarnate: The Beginning of Miyagi Gakuin, Miyagi Gakuin, 1986

長沢倉吉（編）『藤崎三郎助』、藤崎三郎助伝編纂会、1932年

東北学院百年史編集委員会（編）『東北学院百年史』、学校法人東北学院、1989年

学校法人東北学院（編）『登録有形文化財デフォレスト館ハンドブック』、学校法人東北学院、2013年

学校法人東北学院東日本大震災アーカイブプロジェクト委員会（編）『After 3.11 東日本大震災と東北学院』、学校法人東北学院、2014年

C　アメリカ人口センサス

Population Schedules of the 7th Census of the United States 1850,
National Archives Microfilm Publications, Microcopy No.432,
Reel　0037：Middlesex County, Connecticut（スライド番号　60・61/725：ハイド）

Population Schedules of the 8th Census of the United States 1860,
National Archives Microfilm Publications, Microcopy No.653,
Reel　1188：Union County, Pennsylvania（スライド番号　225/ 377：ホーイ）
Reel　1124：Lancaster County, Pennsylvania（スライド番号　92/494：シュネーダー）
Reel　1199：　York County, Pennsylvania（スライド番

号　116/420：プルボー）
Population Schedules of the 9th Census of the United States 1870,
National Archives Microfilm Publications, Microcopy No.593,
Reel　1458：Union County, Pennsylvania（スライド番号　275/418：ホーイ）
Reel　1333：Cumberland County, Pennsylvania（スライド番号　210/482：オールト）
Reel　1354：Lancaster County, Pennsylvania（スライド番号　75/549：シュネーダー）
Reel　1355：Lancaster County, Pennsylvania（スライド番号　237/418：シェーンバーガー）
Reel　1452：Somerset County, Pennsylvania（スライド番号　118/738：プルボー）
Reel　0113：New London County, Connecticut（スライド番号　375/870：ハイド）
Reel　0111：New Haven County, Connecticut（スライド番号　457/888：スター）
Reel　0888：Somerset County, New Jersey（スライド番号　463/610：富田鐵之助）
Reel　0620：Hampshire County, Massachusetts（スライド番号　57/465：新島襄）
Population Schedules of the 10th Census of the United States 1880,
National Archives Microfilm Publications, Microcopy,
Reel　1197：Union County, Pennsylvania（スライド番号　418/819：ホーイ）
Reel　1085：Adams County, Pennsylvania（スライド番号　541/726：オールト）
Reel　1140：Lancaster County, Pennsylvania（スライド番号　42/774：シュネーダー）
Reel　1141：Lancaster County, Pennsylvania（スライド番号　668/843：シェーンバーガー）
Reel　1195：Somerset County, Pennsylvania（スライド番号　93/933と107/933：プルボー）

髙橋 秀悦プロフィール　TAKAHASHI, Shuetsu

1950（昭和25）年生まれ。
東北学院高等学校（榴ケ岡校舎）卒業、東北学院大学経済学部卒業。一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。
1988年4月から現在まで東北学院大学経済学部教授。この間、東北学院大学財務部長（1998年4月～2003年3月）、学校法人東北学院財務部長（2003年4月～2005年3月・2010年4月～2013年3月）、理事長特別補佐（2013年6月～2014年3月）、日本地域学会副会長（2015年1月～現在）等を歴任。